
春と秋

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春と秋

【Zコード】

Z8880Y

【作者名】

まるは

【あらすじ】

怒りのために命を捨てようとした娘と、それを拾った男。男が彼女に教えてくれたのは、「ぶつとばし方」だつた。

大きな町の「外」で暮らす、二人の物語。

とりあえず、1章完結方式で2章くらいの長さの予定。気が向いた時に増えるかも、くらい。

時は、仁大皇帝の御世。

東は東疎とうしづの地から、西は間奈留まなるの果かてまでをひとつとした、大神おおかみ來むらという国があつた。

多くの戦乱を経て統一されたその国は、その頃の名残で各町は大きな壁で囲まれ、人々はその中で生活をしていた。

田畠までをも内包する巨大な町は、外敵を完全に遮断し、長い籠城にも耐えられるように作られているため、よその町へ行く用がない限り出る必要はない。

一生を、町の中終える者も数多くいる。

他の町へ行く時は、役所へその印いんを申請し、許可証きょかくをもらわねばならない。

ならず者を、町の中に入れないようにするためである。

では、町の外に住んでいる者はいないのか。

答えは、「こる」だ。

山や海での生活を生業とする者。

よその地から、移民してきた者。

町から、何らかの理由で許可証なしで出て行った者。

彼らは、「外」の人間として、厳密に「内」とは違う法体系の中に置かれることとなる。

これは、そんな町の「外」に住む者の物語。

「だめだ、だめだ！ 許可証を持たぬ者を、入れることは出来ん！」

「うと立つ門番一人は、千秋の前に立ちふさがっていた。

標準よりも小さい16歳の少女にすぎない彼女からすれば、彼らは鬼のように大きく恐ろしい者に見える。

しかし、通してもらえないからと黙つて、「はいそうですか」と、回れ右出来ない理由が、千秋にはあった。

「どうしても、内町のお役所に、申し上げたいことがござります。それさえ終わればすぐに出ますので、どうかお願ひしますー。」

大男の背にそびえるのは、門。

その門の両側に広がる、高い高い石組の壁。

堅牢な壁で覆われた、守られた町。

千秋は、その中にどうしても入らなければならなかつた。

粗末な着物を一本で縛りつけただけの、貧乏農民の末娘である彼女は、鼻緒のちぎれた草履を手に持ち、門番の頑なな心を何とか緩めようと必死に訴える。

対する門番は、この国の軍では一般的な、鋳造された量産型の兜と鎧を身につけている。防具だけでなく、槍まで持っている。

兜のてっぺんから伸びているひれは、色あせた緑色だ。

元々は鮮やかな緑で、西域を担当する軍の所属であることを表していた。

「この町の治安を維持するために、中央から任を下された者たちだ。

彼らより身分の高い者からの命令、あるいは相当な額の賄賂でも積まない限り、彼らの心を動かすことは難しいだろう。

だが、その両方を持ち得ない千秋は、ただ懸命にお願いするしかないのだ。

「ダメだと黙つておるだろ？」「…」

すがりつゝとする千秋を、門番はいつもたやすく跳ね飛ばした。軽い彼女の身体は、まるで毬のように放り出され、地面にすっ転がる事になる。

身体のあちこちが痛むが、千秋はそれでも諦めきれない。

立ち上がり、門番にもつ一度懇願しようとした時。

「これ以上、我々の手を煩わせると、本当に容赦しないぞ」

門番は、手に持った槍を構える素振りを見せた。

千秋は、さすがに躊躇した。

「」で、自分が死んでは誰が役所へ訴えるのか。

だが、引き下がつては、結局同じことになる。

千秋は、着物の袂たもとから、手紙を引っ張り出した。

彼女の父が書いたものだ。

役所に訴えたいことの仔細が、「」に記されている。

自分が入れなくとも、この手紙が届けば何とかなるかもしれない。

「では、これを役所の方に渡してもらえませんか？」

紙を手に入れるのも難しい中、何とか用意したものである。

しかし、門番一人は顔を見合させ、嫌そうな表情を浮かべてみせるではないか。

「軍人を、タダ働きさせる気か？」

告げられた言葉は、堂々と賄賂を要求するものだった。

人はともかく手紙は入れてやらないでもないが、タダでは駄目だと言っているのだ。

千秋は、上に立つ者の中にひどい人間がいるのは知っていた。

下の者を虐げ、踏みつけることなど何とも思っていない人種だ。

だが、そんな人間ばかりではないと、心のどこかで思つてもいたのだ。

何故なら、幼少の時に過ごした町では、偉い人の中にもいい人がいたのを見て来たから。

だが、千秋の前に立ちふさがるこの軍人たちは、平民よりほんのちょっとだけしか偉くないにも関わらず、腐りきっている。

ギリと、奥歯を噛みしめて、彼女は怒りを喉元までせり上がりせた。

次に彼らが言つことを、千秋は知つている。

「まあ、そうだな。金がないって言つんなら……身体で払つてもいいぞ」

視線が、彼女の身体を舐めるように動いた。

痩せて、凹凸など皆無に等しい彼女の、こんな鳥ガラのような身体であつても、そんな目で見ることが出来るのだ。

ああ。

どにも、同じだった。

千秋は、手紙を握りしめて怒りにわななく。

喉元でどじめでいた怒りが、いまにも唇から炎のよつて飛び出し
そつになるのを感じながら、彼女は一步踏み出していた。

こんな世になんて。

「お金の代わりに、私の命を差し上げます……」

こんな世になんて 未練なんかない。

千秋は、門番に向かって駆け出した。

反射的に突き出される槍の先に。

彼女は。

飛び込んだ。

千秋の世界は、一瞬にして田まぐるしく変化した。

自分の身体が突然一回転し、鈍く激しい音と共に地面に落ちてい
たのだ。

地面に尻もちをついたまま、彼女はほけっとその光景を見ていた。

自分と槍の間に立つ、炭を背負った後ろ姿。

槍の穂先はへし折られ、千秋の足元に力なく落ちている。

わなわなと震えている軍人たちを放置して、その人は千秋の方を振り返った。

「怒りは、そんな風に使うもんじゃないよね」

明るくあっけらかんとした声の、糸田の男がそこにはいた。

「ありがとうございます……」

千秋は、おそるおそる礼を言った。

山の中腹にある炭焼き小屋らしき粗末な家は、建てられている場所こそ違え、自分の家を彷彿とさせる。

煮炊きに使われるだらう囲炉裏に火が入れられると、疲れきった身体がほっとするのが分かる。

「お礼なら、もう何度も聞いたから、もういいよ」

桶の水を鍋に入れ、糸目の男はそれを囲炉裏へと吊るす。

門の前で大立ち回りをしてしまった彼と千秋は、すぐさま門番に取り押さえられそうになり、慌てて逃げ出したのだ。

千秋が逃げたというよりは、この男に手を引つ張られ、付き合わされたと言つた方がいいか。

いや、町から離れてしまひ、千秋は途方に暮れてしまった。

目的を果たすことも出来ず、死ぬことも出来ず、不完全燃焼の怒りの行き先はどこにもなくて、本当に生きた屍のように突っ立ってしまったのである。

そんな千秋の頭に、糸目の男はぽんぽんと手を置いてくれた。

「とりあえず、僕の家に行こうか」

魂が抜けたままの彼女の手を、炭を背負つた男が引つ張つて行ってくれる。

きっと、彼は町へ炭を売りに来たのだらう。

町だけでは貰えない商品を売る者は、町に入る許可証を得ることが出来る。

おそらく、彼はそれを持っていたに違いない。

なのに、千秋の無謀な事に飛び込んでしまったせいであんなことになり、しばらくは町への出入りは出来ないだらう。

とぼとぼと手を引かれて歩きながら、少しずつ正氣に戻ってきた千秋は、田の前の男に申し訳ない思いでいっぱいになつた。

「どうして……止めたんですか？」

助けてもらつて余計なお世話と言いたくなかったが、結果的に男にとつても千秋にとつても良い結果にはなつてないように思えた。

「言つただろう？ 怒りの使い方を間違えてるつて……あそこで君が、怒りに任せて死んだって、ただの犬死にじゃないか」

握られた手に、少し力がこもつた。

背はそれほど大きい訳ではないが、男の手は大きく、そして温かだ。

悪い人ではないのだろう。

いや、きっといい人だからこそ、無謀な千秋を身体を張つて止めてくれたに違いない。

ただの犬死に。

それは、心のどこかで分かつていた。

自分の死など、あの軍人たちの心を動かす材料にはなりはしないのだ。

もう片方の手に握った父の手紙を、千秋はもつとぎゅうっと握りしめた。

「10年くらい前から、そとむら外村がたくさん作られ始めたんですね」

千秋は、炭の背に向かつて咳いていた。

彼の背は、俗世の人のように思えなかつたのだ。

貧しい者も助けてくれる、聖人か菩薩の化身ではないかと。

「新しく土地を開墾して田畠に変える。開墾した者に土地は与えるということで、内町に住んでいた次男坊の父は、喜んでその外村作りに参加しました」

千秋が、小さい頃の事だ。

内町に人が増えすぎ、食料の自給が困難になつてきたため、国はその両方を同時に解消するべく政策を立てた。

内町の人手を外に出し、彼らに農地を作らせるという方法だ。

ただで土地が手に入る。

それは、跡を継げない次男以降の男たちの、心を動かすものがあったようだ。

家族を連れて彼らは外に出て、苦労して苦労して田畠を開墾し、そしてそこに作物を実らせるに至つた。

だが、政策には無責任な部分があつた。

国は、新たに開墾した田畠から、面積に応じての一一定の税金を取り立てるのみにしか興味がなかつたのだ。

新たに出来た外村の秩序や治安は、全て地方の権力者を村長に据えて、彼らに任せたのである。

確かに、土地はそれぞれの者に与えられたが、同時に村長は重税も課した。

とても、家族が食べて行けないほど税の重さだ。

外の村は壁に囲まれていないため、人々を守るために強い者を雇わなければならぬという理屈で、國のものとは別に税を徴収した

せいである。

雇われた荒くれ者たちは、治安を守ると同時に、彼ら自身が治安を乱す種となり、ちょっとでも逆らつ家があれば、ひどい目にあわされることとなつた。

更に、農民の足元を見るかのように、いつ言い放つたのだ。

『税金が納められない者は、娘を納めよ。娘を納めた者は、向こう2年の税を減免してやる』

農民たちは、怒り狂つた。

反乱を企てた。

だが、彼らはそれを予見していたのか、『不穏な動きをしている輩について報告した者も、1年の税を減免してやる』とも言ったのである。

そのせいで、他の村人を売る者が出た。

元々、開墾のために集まつた者たちであり、古くからの付き合いがあるのでではなく、一枚岩ではないところを狙われたのだ。

こうして、村は横のつながりも断たれ、誰も信じられない状態になつていき、ついには食つものに困つて娘を差し出し始めたのだ。

こうなると、未来は暗く闇ざされたものとなる。

圧制を覆すことも出来ず、かといって、娘の数にも限りがある。

餓死者が出たり、逃亡者も出たりする。

耕す者のいなくなつた土地には、また何も知らない内町の人間たちが、騙されて連れてこられるのだ。

横でつながれのならばと、千秋の父は内町の役所へと窮状を訴える直談判の手紙を書いた。

それを、家にいる最後の娘に託したのだ。

最後の娘。

それは、もし一家が重税に押しつぶされそうになつた時に、姉たちのようにあの家に差し出され、慰み者にならねばならないということ。

そうなる前に。

父の手紙を持つて、千秋は走つた。

一番近い内町まで丸一日、握り飯一つと川の水だけでよつやくたどりついたのだ。

結果は、ひどいものだつたが。

そして、死にそこなつた千秋はいま、糸目の男と向かい合つて座つている。

怒りの余り、この世を見限つた彼女の前にいるのは、菩薩の化身

なのだれつか。

ゆつべつと鍋の湯が沸いていくのを、千秋は見るともなしに見ていた。

「思つたんだけどね」

毛先の跳ねたざらざら髪を、野は一度かきまわした。

声は、至つて明朗だ。

千秋の村の不幸な窮状を聞いてなお、そんなものに振りまわされる様子などない。

そして。

「憑に奴は、ぶつぱじこと御みよ

あつけらかと、とんでもないことを口にしたのだった。

「ぶつ……とばす？」

思わず、千秋は頓狂な声で返してしまった。

余りに明るく、しかしひどい内容を聞いたからである。

「そう、ぶつとばす」

ぎゅっと拳を作つて、男はにこにこと笑う。

彼女は、思わずその拳を見つめた。

それは、この人がぶつとばしに来てくれるということだろうか、
と。

彼は炭焼き職人のようだが、非常に強い力を持っているように見える。

本当に間近だった槍から彼女を引きはがして転がしつつ、その穂先をへし折つたのだから。

糸目の男が本気になつたら、少々の相手など本当にぶつとばせそうだ。

「ああ、違うよ」

千秋の瞳に浮かびかけた、希望のようなものを見て取つたのだろう

うか。

彼は、ぱっと自分の拳を解いた。

「拳でぶつとばすのは……」

「……しながら彼は、指でちょこちょことひかりを指していく。

そう、千秋の方を。

思わず、彼に差されている先を見た。

それは　自分の右手だった。

手を開いて閉じて、それからもう一度男の方を見ると、つるつると頷いている。

「そりそり、ぶつとばすのは……君の拳で、だよ」

時が止まる、瞬間だった。

考えたこともない」とだつたし、出来るとも思えなことだ。

千秋は、ただの農民の娘に過ぎない。

村に圧政を強いる屋敷に乗り込んだといひで、拳一発即ち死んで出来ないのは明白だった。

「で、でも……」

「出来るよ。死ぬ気になれば、出来る」

否定の言葉は、より強い肯定に飲み込まれる。

はつと、声に引き寄せられるように、元談ではいなかった。彼を見た。

笑つてはいるが、冗談ではない。

明るくはあるが、茶化してはいない。

彼は、本氣で言つているのだ。

「ぶつとばし方は……そうだね、僕が教えてあげよう」

糸目の中を更に糸にしながら、彼は千秋に微笑んでくれた。

そこから、千秋と『糸目先生』の付き合いが始まった。
誰に習つたのだろう。

糸目先生は、武道の心得があった。

しかも、自分より大きい者を簡単に転ばせることが出来る、まるで魔法のような技だ。

千秋は、何度もその身で練習台となり、気づいたら地面にすつ転

んでいる羽田となる。

「Jの技を会得できれば、彼女も大男相手に怯む必要もなくなるかもしねえ。」

そんな夢を、千秋は彼の技に見た。

一度は捨てた命だから、血のにじむ努力をすれば、一撃浴びせられるかも、と。

死ぬのは、その後でも出来る。

そう彼女は、開き直った。

のだが。

「うひゃあー！」

千秋は、奇妙な感触に飛びあがることとなる。

いつの間にか後ろに回った糸田先生が、千秋の両脇から手を回し、彼女の胸に触っていたからだ。

「せ、先生！ 何するんですか！」

反射的に肘鉄を食らわし、彼から離れながら、着物の前を必死で含ませる。

じきじきじきぐぐぐで、自分の全身が震えているのが分かつた。

彼もまた、こんな鳥ガラの自分をそういう目で見るのがと衝撃を覚えていたのだ。

肘鉄を食らつたところで、大して効いていない顔の糸目先生は、ふうとため息をついた。

「君は、男たちの中に乗り込んで行くんだよ。みんな真正面から、正々堂々と戦つてくれるわけないじゃないか」

正々堂々としか聞こえない明快な声に、千秋は全身で納得した。あの無法の男たちであれば、何でもやるに違いない、と。

彼は、それを千秋に教えようとしてくれているのだ。

どんな卑怯な手にも、彼女が動じないよう。

「わ、分かりました、先生！ 疑つて済みませんでした！」

ぎゅっと両の拳を作つて、彼女はどんな仕打ちにも耐える決意を改めてしたのだつた。

「あー、いや……その……」

先生は、何故か少しバツが悪そうに何かを言いかけたが、「さあどうぞ」と、千秋がぺったんこの着物の胸を差し出す様を見て、大笑いを始めてしまう。

「せ、先生？」

こつもの「」ではなく、ゲラゲラと笑い転げる様は、彼女を
唖然とさせた。

「いやいや……悪い悪い。ひょっとふざけすぎたね……まあでも、
その意気だよ」

親指を立てて笑顔を向けられても、千秋には何のこゝやら分から
ない。

はあと曖昧に答えるながら、彼女はそれから加わった、先生の性的
な嫌がらせにも耐えつつ修行を重ねるのだった。

「おは…… ょー」

『 ょー』 のタイミングで尻を撫でられる。

真後ろに立たれるまで、近づいて来ているのに気付かずに、千秋
は何度となく尻を撫でさせてしまつ。

『 おは』 といつも言葉分の猶予があるにも関わらず、避け切れない
のは自分がどうぞいからだろうか。

こんなことでは、まだまだ男をぶつとぼすことなど出来はしない。

頑張らなきや。

千秋は、夜な夜な修業の流れを頭の中で繰り返しながらも、疲れ
に耐えかねて、かくりと眠つてしまつのだつた。

やうして何日も過ぎたるに従つて、彼女は糸田先生のことを中心から

信じられる人だと分かつた。

彼が本気になれば、彼女の貞操など紙ぐず同然である。

なのに、先生はまったく千秋に手を出さなかつた 修行の時は別として。

言われた通りに出来なくとも、彼は声を荒げたり怒つたりしない顔の構造と声のせいかもしけないが。

ただ、じつくりと粘り強く、そして時々性的な嫌がらせで千秋に悲鳴をあげさせながらも、余り深刻にならないように修業を進めてくれた。

力技の武道ではない分、人の動きや流れが大事で、とにかく糸目先生と向かい合つた。

先生が、わざと力で押してくる。

その手をひねり、一回転させて倒すのだ。

急所の勉強もした。

手数を少なく、相手を倒す技。

千秋は、多くの男を同時に相手にしなければならなくなる。

それを見越して、最低限の力で相手を動けなくさせていくのだ。

先生は、どうしてこうこうことを知っているんだろう。

それ以前に。

どうして、自分に教えてくれるんだろう。

千秋の中に、そんな疑問がふわりと浮かんで、そして消えていく。
先生のことを知りたいと思ったが、知った後に何があるわけでもないことも気づいてしまったのだ。

ひどい男をぶつとばせたところで、千秋がそのまま村に残り続けられるわけもない。

村を出たところで、彼女に行く宛てがあるわけでもない。

ぶつとばした後、男たちに殺されるか、村を出てのたれ死ぬか。

結局、最後はそんなものだろう。

そんな千秋の沈む考えは、長くは続けれれない。

いつの間にか背後に回った先生に、「隙だらけだね」と、太ももを撫で上げられていたからだ。

「ひやーー。」

どうして、情けない悲鳴が反射的に出てしまうのだらうか。

糸目先生が、簾笥たんすを漁つてゐる。

夕餉を終えた時間、囲炉裏で燃える炎だけで探し物は大変そうだ。
手伝おうかと千秋が立ち上がりかけた時、「あつたあつた」と、
先生は何かを引っ張り出した。

「はい」

差し出されたのは、赤地に白い花の描かれた着物。

晴れ着ほどの美麗さではないが、普段使いにしては良い物だと分
かる。

「え？」

差し出された女物のそれを、反射的に受け取つてしまいながらも、
千秋は意味が分からずに先生を見上げる。

「あげる。ちょっと大きいかもしねいけど、おはしょりで調整出
来るよね」

「ここに」と、あつけらかんど。

ただ「あげる」ために出した以外の何の思惑もなさそうな、幸福
が絵になつたような笑顔。

菩薩のようだと思ったこともあるが、千秋は「」数口は少し考えを改め始めた。

彼は、人である、と。

悩みや苦しみがないなんて、人にはありえない。

いまはこんな風に、笑顔を浮かべている彼であつたとしても、過去もまたそうだったわけではないのだ。

事実、いつして箇笥から文物の着物が出てくる。

「」に、女性がいたといつとの証拠。

先生は、年齢が分かりにくい顔をしているが、十代なんてありえない。おやじく一十代後半くらいではないだろうか。下手したら二十代。

女性と暮らしていたとしても、何らおかしくはなかつた。

その女性が、いまはどうなつたかは分からないが、少なくとももう彼の元にはいないのだ。

「」にない物……もられません

先生の悲しい部分に触れた気がして、千秋はついそれを押し返そつとした。

これを着た自分を見て、彼は昔を思出してしまつのではないかと思つたのだ。

「討ち入りする時に着てよ。思い切り綺麗に着飾つて、ぶつとばしておいで」

なのに。

先生は、愉快でしようがないという風にケラケラと笑うのだ。
千秋が、この着物で男をぶつとばしている姿を、想像しているの
だろうか。

そつか。

彼女は、着物を見つめた。

そつか、死に装束にくれたんだ。

女として生まれて十六年。

一番のよかつた頃と言えば、幼少の内町住まいの時だった。

商家の次男坊だった父は兄の店で働いていて、身内びいきの援助
の入った給金のおかげか、それなりの暮らしが出来ていた。

その頃は、姉たちのおさがりではあるが、千秋もよい着物を着て
いた気がする。

これを着て、死ぬならいいか。

最後の最後に、力を貸してくれた先生に見守られて死ねるように

感じた。

先生の昔の女性への悲しい思いも、それと一緒に死ぬとい。

「ありがとうございます、私、頑張ります！」

ぎゅっと綺麗な着物を握りしめ、彼女は糸田先生を見上げた。

「あー……なんか、また変な事考へてるでしょ」

そんな千秋に、彼は苦笑いを浮かべていた。

「あの着物、着ないの？」

相変わらず、着つきリスズメのボロ着物で鍛錬に励む彼女に、糸
田先生が問いかける。

「はい、あれは一張羅ですから。大事な最後に着ま……つひひやー！」

返事が終わる前に撫でられる尻に飛びあがりながらも、千秋はそ
の手を掴んで一回転させていた。

ほとんど体重を感じないほど、とすっと彼は落ちる。

わざと技をかけられたのだと分かるほど、それは静かだった。

さすがです、先生。

性的な嫌がらせから技の終わりまで、きっと頭の中で台本が出来上がっているのではないかと思えるほど、素晴らしい流れだった。

逆に、その台本のために、まったく鳥ガラな身体を触らなければならぬ先生が、かわいそうに思えるほどである。

「愁傷様、と言ひべきか。

もう一つ着物は、確かに彼の言ひように少し大きかった。

おそれらしく、千秋よりも肉づきのいい女性のものだったに違いない。さぞや先生は、彼女の身体に触った時に、悲しい気分を味わっているだろ?と思えたのである。

だが、これでも少しほは肉がついてきたのだ。

ここでの食事は、主に山菜や先生が捕まえてきた鳥や獣の肉。

外村にいた時とは比べ物にならないほど、おなかいっぱい食べられていた。

家族のことを考えると、後ろめたく思つほど。

死んだ氣になつて戦う修行に明け暮れるはずの千秋だったが、こには余りに居心地が良すぎる。

死と等価交換したのならば、ここは修羅の道でなければならなか

つたはずなのに、先生は明るくて優しいし、食事もおいしい。

足りないものなんて、何も気にならないほど、ここは幸せだった。

弱い心が、彼女の足を引っ張っている。

「の先にある、いつか必ず来る修羅の道を避けたいと思つ心だ。

それは、この幸せな時間が産みだした弊害でもある。

だが、千秋は行かなければならぬ。

父のため家族のため、犠牲になつた姉たちのため、自分も身を捧げるつもりだつたのだから。

そして。

「うんうん、そろそろ及第点かな」

地面に転がつたまま、先生がにじにじとして言つた。

転がした千秋は、それを少し茫然としながら聞いていたのだ。

ついに、その時が来た、と。

夕方の冷たい山川の水で、身を清める。

泥や埃と共に、俗世の全てを洗い流すように。

食生活の改善のおかげで、少しだけふくらんだように思える胸を、千秋は皮肉に見下した。

綺麗になつた身体を、糸田先生にもらつた着物で包む。

髪を結いあげ、山の赤い実のついた枝をかんざしにして差して止める。

新しい草鞋は、自分で作つたもの。

長い枯れ草を、よつてこしらえている時、心は静かだった。

怒りとか憎しみとか、確かにあつたはずなのだ。

薄れてなくなつたわけではない。

だが、それは違つものに姿を変えて、自分の心の奥底に座つている気がする。

草鞋をはいて、千秋は小屋へと戻つた。

ちゅうどタ飼の仕度をしていた先生が、「おかえ…」と言いかけて言葉を止める。

いつも小汚い姿ばかり見せていたので、きつと驚いたのだらう。

馬子にも衣装と言いつていろか。

「……」

静かな静かな夕食になつた。

だが、寂しい夕食じゃない。

千秋は、目の前に座る先生の顔を時々見ながら、笑みを向けられる
と、自然に笑みで返していた。

まるで。

この一瞬だけは、何十年も連れ添つた夫婦のよう。

糸目先生は、そんなことを言われても困るだらうが、彼女にとつてはそれがたとえ疑惑的なものであつたとしても、必要なものに思えたのだ。

あるはずだった、誰かとの未来。

それを、ささやかに千秋は体験することが出来たのだから。

食事と片付けが終わって、改めて彼女は団炉裏の前で先生に向き直つた。

きちんと正座をし、そして両の指先を板張りの床につく。

「これまで、どうもありがとうございました。命を救って頂いたこと、教えていただいたこと……感謝は言葉に尽くせません」

いまいひして、静かな気持ちでいられるのもまた、先生のおかげだ。

彼は、憎しみの戦いは教えなかつた。

いつも[冗談混じりの性的ないやがらせをしながら、千秋の肩を抜いてくれた。

おかげで、短い間だったが、生き延びたことを後悔せずに済んだ。
無為に槍に飛び込んで死ぬような、後ろ向きな死ではなく、自分のまっすぐな心のまま正々堂々とぶつかっていく、前向きな死の道を選ぶことが出来た。

全て、この炭焼きの男のおかげである。

彼が何者であろうとも、この感謝の心は変わりはしない。

「……」

真剣な気持ちが、伝わったのだろうか。

頭を下げているので表情は分からぬが、先生は何も言わないでいてくれる。

「私に何か出来ることがあれば、恩返しがしたいのですが……」

とくんど、自分の胸が跳ねる。

心のどこかで、奇妙な覚悟があつた。

「でもし、彼が自分を女として求めるようなことがあれば、それを受け入れよつと。」

いや。

心のどこかで、それを願つていたのだ。

「この人にならば、最初で最後の女の身の自分を、捧げても構わないのではないかと。」

静かな静かな時間が流れる。

パチと囲炉裏の炭がはぜ、小屋の外をわずかな風が吹き抜け、戸をカタカタと揺らす音が、とても大きく聞こえるほど。

「存分に……ぶつとばしておいで。それが、僕の願いでもあるよ」

糸目先生は、最後まで素晴らしい人だつた。

俗っぽい女の身よりも、彼女がやうつとしていることの応援してくれるのだ。

分かつていたことだつた。

千秋は、ゆっくりと顔を上げて彼を見た。

糸田でよく表情が分からぬながら、やさしく微笑んでくれて
いる気がする。

「はー、ぶつとしましてきまーす」

さよなら、先生。

さよなら。

千秋は、夜も明ける前に起き出して、最後にもう一度布団に横たわる糸田先生に深く三つ指をつべと、やっと小屋を出たのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8880y/>

春と秋

2011年11月29日19時50分発行